
ポケットモンスターSTORY

チョコボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターSTORY

【Nコード】

N5238H

【作者名】

チヨコボール

【あらすじ】

この物語は、カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウと続いていきます。上手く書けるかわかりませんが、よければ読んで下さい。

自己紹介？&キャラ紹介（前書き）

正直自信がないです……

自己紹介？&キャラ紹介

初めてポケモンの小説に挑戦します。
最初は、キャラ紹介をしたいと思います。

ダン

出身 マサラタウン

年齢 10歳

性別 男

性格

ポケモン大好きな少年
元気が取りえ

マキ

出身 マサラタウン

年齢 10歳

性別 女

性格

少しドジ

でも、ポケモン大好き
ダンに恋をしている

サイ

出身 ニビシティ

年齢 14歳

性別 男

性格

賢く、岩タイプポケモン使い

ミユキ

出身 ハナダシティ

年齢 14歳

性別 女

性格

おっとり、マイペース

サイに恋をしている

シゲキ

出身 グレン島

年齢 20歳

性別 男

性格

優しい、お兄さんキャラ
炎タイプ使いでかなり、強い

サキ

出身 グレン島

年齢 20歳

性別 女

性格

お笑い系が大好き
シゲキと結婚している
水タイプ使い

ケント

出身 マサラタウン

年齢 10歳

性別 男

性格

嫌みを沢山言う、腹立つ人物
主人公である、ダンのライバル的存在

キャラクターは、こんな感じでやっていきたいと、思います。
なにか、もしこれは、変えた方がいいってのがありましたら、感想
に書いて下さい。

以上（笑）

自己紹介？&キャラ紹介（後書き）

感想待ってます（笑）

旅立ち

「あら、今日は起きるの早いわね」

今喋ったのは、俺の母さん

そして、俺の名前はダンって言うんだ、よろしく。

「ダン、ブツブツ独り言言っていないで、早くご飯食べちゃいなさい」

「わかってるよ。いただきます」

ちなみに、今日の朝食はご飯、味噌汁、ハムエッグだ。

「ダン、オーキド博士になんのポケモン貰うか、決まったの？」

「もちろん決まってるよ。俺のパートナーとなるポケモンなんだから」

俺は、急いでご飯を食べた

そして

「母さん行ってきます」

「気をつけて行くのよ、ダン」

俺は、母さんに言うと、走ってオーキド研究所へ向かった。

・オーキド研究所・

ここは、オーキド研究所である。

「オーキド博士ポケモンください」

「おおーダン君来たか、それじゃあ、着いてきなさい」

俺は、オーキド博士の後ろを歩いて行つた。

「さあーカントーの初心者用ポケモンの、ヒトカゲ、ゼニガメ、フシギダネの中から、好きなポケモンを選びたまえ」

オーキド博士の話しは、長いからなあ

「オーキド博士、俺ヒトカゲを貰います」

「ヒトカゲじゃな。これがヒトカゲのモンスターボールじゃ」

俺は、オーキド博士に一個のモンスターボールを渡された。

「ヒトカゲを出してあげなさい」

「出てこいヒトカゲ！」

俺は、オーキド博士に言われた通りモンスターボールから、ヒトカゲを出した。

皆さんヒトカゲのことを、知ってるハズだから、説明はカットします。

『カゲ？』

ヒトカゲは、俺の顔を見ると、顔を傾けた。

「ヒトカゲよろしくな。今日から、俺達はパートナーだ！」

『カゲ！』

俺は、ヒトカゲにそう言うと、抱き付いてきた。
かなり、人懐っこいな

「それじゃあ、オーキド博士。俺もう行きますね。」

「ちょっと待ちなさい。これを持って行きなさい」

俺は、オーキド博士にモンスターボール五個と、ポケモン図鑑を渡された。

「ありがとうございます。それでは、行ってきます」

『カゲカゲ！』

多分ヒトカゲも、行ってきますと言ったのであろう。

新たな仲間（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。ちょっと、これから先どうするかを
考えてました

新たな仲間

「そうだ、母さんにヒトカゲ見せに行くかな」

『カゲ？』

俺は、ヒトカゲをモンスターボールから出して今、オーキド研究所を出たところだ

- 自宅 -

「母さん、オーキド博士にポケモン貰ったよ」

俺は、家につくなり、大声で母さんに言った。

「あら、ダン貴方ヒトカゲを貰ったのね」

『カゲ！』

ヒトカゲが、母さんの言った言葉に答えた。

「俺ヒトカゲが大好きなんだよ」

俺は、そういつとヒトカゲを強く抱きしめた

『カゲ！』

ヒトカゲは、痛かったのか、俺の顔にひのこをしてきた。

「アチチッ」

俺は、ヒトカゲのひのこをくらい、洗面所に行って顔を冷やした。

『カゲ』

ヒトカゲは、申し訳なさそうに、洗面所に来た。

「大丈夫だよヒトカゲ。ごめんな力を入れすぎちゃって」

『カゲ！』

俺は、ヒトカゲにそう言うヒトカゲは、抱き着いてきた。

（ヒトカゲを選んで正解だったかもしれないな）

俺は心の中ではいた

「ダンこれ、荷物よ」

母さんも洗面所に来てリュックを渡された

「ありがとう母さん、それじゃあ、俺行くね」

「行つてらっしゃい」

母さんは、手を振りながら見送ってくれた

- 1 番道路 -

「ヒトカゲ一人じゃ、可哀相だし、なにかゲットしておくか。」

『ポポ』

草むらから、ポップが出てきた。

「ポップかあゝ、ゲットしておくか」

『カゲ!』

ヒトカゲは、やる気いっぱいの声で言った。

「ヒトカゲ、ポップの羽にひのこだ!」

『カゲ!』

俺は、ヒトカゲにそう言う綺麗に羽にひのこが当たった
どうやら、このヒトカゲは、命中率が高いらしい

「いっけえ! モンスターボール」

俺は、ポップにモンスターボールをぶつけた。

カタッカタッ

「ゴクッ」

モンスターボールが、左右に揺れている、つい唾を飲み込んだ

カタッカタッ……カチッ

モンスターボールが、止まったということとは

「よっしゃゝ! ポップゲット!」

こうして、新たに仲間が増えたのであった。

幼なじみ（前書き）

更新遅れてすみません

幼なじみ

俺の名前はダン、パートナーは、ヒトカゲ
みんな俺のこと覚えているか？

と、言う訳で始まり始まり

「作者にこんなこと言わされて少し恥ずかしいぜ」

『カゲ』

ヒトカゲも、同じ気持ちらしい。

「まあ、忘れて早く先に進まないと」

「ダン!!」

「ん？　なんだ、さっき誰か俺の名前を呼んだような」

俺は、辺りをキョロキョロ見渡していると、急に視界が真っ暗になった。

「だれだ？」

この声は、まさか!……

「マキだろ、どうしたんだ？」

俺は、後ろで目隠しをしている、人物に話しかけた。

「なんで、わかつちゃったのつまんない」

マキは、なんだか少しガツカリしていた。

「それで、マキどうしたんだ？」

「ダン今日出発したんだよね？」

「正確に言つと、旅に出たのは随分前なんだが、作者が全然更新しないから、全然先に進めないんだ！」

俺は、溜まりに溜まったことを、少し早口調でいった。

「それで、私の用件なんだけど、一緒に旅しない？」

「ん？ 構わないぜそういえば、マキはオーキド博士からなんのポケモン貰ったんだ？」

「やった。それと、私が貰ったのは、この子よ」

マキは、そう言うともンスターボールからポケモンを出した。

『ダネ？』

出てきたポケモンは、フシギダネだったフシギダネは、俺の顔を見ると頭を傾げた。

「そういえば、ダンは何を貰ったの？」

「いや、俺のポケモンずつと俺の隣にいるから」

俺は、自分の隣に指をさして、マキに気付かせた。

「ヒトカゲ貰ったんだ」

『カゲ！』

ヒトカゲは、マキに抱き着いた。本当に人なつっこいポケモンだな。

「そういえば、ダンは今どこを目指して歩いているの？」

「ニビシティに向かってるんだ、でも途中にトキワシティがあるから、そのPCに泊まるっと思う」
ポケモンセンター

俺は、そう説明するとマキは

「それじゃあ、トキワシティ目指して出発進行」
こうして、俺は幼なじみであるマキを連れて旅をすることになった

トキワシティ

「そういえば、マキはなんでフシギダネ選んだんだ？ てつきり、ゼニガメを選ぶと思っていたぜ」

俺がそう言つと、ヒトカゲと仲良く歩いている、フシギダネからなにか、冷たい目線を感じた。

「それはね、私以外だと思っけど、フシギダネ大好きなのよ」

マキがそう言つと、フシギダネはしょんぼりしていた、マキのいった「以外」という言葉が痛かったらしい。

「へえ」と言うことは、あいつがゼニガメ貰うのか」

俺は、あいつの顔を心の中で浮かべようとしたが、全然浮かんでこなかった。

「そういえば、ダン彼とは仲悪かったわね。そういえば、彼名前なんて言つたっけ」

どうやら、マキも覚えてないようだった

「うーん」

俺と、マキは必死に思い出そうとしたが……

「ダメだ思い出すの諦めよう」

「そうだね」

俺は、思い出せないから諦めることにした、それにマキも賛成した。

『カゲ？』『ダネ？』

ヒトカゲとフシギダネは、俺達が何を考えているのか、わからずに

頭を傾げた。

「ダン、話しは変わるんだけど何か、ポケモンゲットした？」

「ああ、ゲットしたぜ出てこい」

俺は、モンスターボールから、ポツポを出した

『ポポ〜』

ポツポは、俺の肩の上に乗った。

「ダン、ポツポゲットしたんだね。ねえねえ、ダン知ってる？
トキワの森にピカチュウが出るらしいよ」

マキは、すごい、笑顔で俺に言った。

「知ってるよ。もちろんゲットするつもりだぜ」

「私もゲットするよ」

どうやら、俺もマキもピカチュウが好きらしい。

いや、訂正俺はライチュウの方が好きだな。

（これで、ダンとお揃いのポケモンがゲット出来る）
なんだか、マキは小さな声でぶつぶつ言っていた。

そして、しばらく歩いて

「マキ、トキワシティ見えてきたぞ！」

「今日は、ここで泊まるんだっけ？」

「ああ、そっだよ」

あれ？俺言わなかったか？

「ダン、なに考えてるの？PC行くわよ」

気付くとマキは、もう10メートルぐらい前にいた

「今いくよ」

俺は、マキを追い掛けて走った。

・トキワシティPC・

「ジョーイさん、ポケモンお願いします」

偶然にも、俺とマキの声がハモった。

「はい、かしこまりました。」

ジョーイさんは、そう言うとモンスターボールの入ったケース？をラッキーに渡した。

「ダン、私お腹空いたからさ、食堂行かない？」

「ああ、構わないよ」

と、言うことで、俺達は食堂へ行くことにした。

この時俺は、マキに色々遊ばれることをまだ知らなかった。

トキワシティ（後書き）

出来れば、感想よろしく

マキのちょっとしたいたずら（前書き）

全然ちょっとでは、ありません（笑）

マキのちょっとしたいたずら

俺達は、今マキが腹減ったって言うから、食堂に来ていた。

「ダンは、何食べる？」

「俺は、ラーメンでいいや」

「それじゃあ、私が注文してきてあげるね」

マキは、そう言うと言いつた。

（数分後）

注文した料理が届いたそして、俺は言葉を失った……………

「マ、マキこれはなに？」

俺はラーメンを指を指しながらマキに言った。

「ん？ラーメンだけど？」

マキは、そう言いながらハンバーガーを食べていた。

「マキこれは、ヤバイよ…」

俺のラーメンは、凄いことになっている。

スープの色は真っ赤

火山見たいにゴボゴボしてる。

「なんだか、美味しそうじゃないその、激辛火山ラーメン」
マキは、ニヤニヤしながら俺に言ってきた。

「それじゃあ、マキ食ってくれ！」

俺はラーメンの入ったどんぶりをマキに渡した。

「こんな得体の知れないもの食べれないよ」

「わかったよ……」

俺は、もう言い返す気力もなく、半泣き状態で食べることを決心した。

ズルズルズルズル

俺はラーメンを食べた

あっ！

案外美味しいかも

だが………

「ブハッ」

俺は鼻から黒い煙りを出してしまった。

（余りに辛かったから）

「ま、マキ水持ってきてえ」

俺はマキに水を頼んだこの時自分で取りに行けば良かったと後悔することになる。

「はい、ダンお水だよ」

マキは、水を持ってきてくれた。

気のせいだろうかんだか、水の色が赤い！

だが、俺は気にすることなく水を飲んだ

その瞬間………

「かれえ」

俺は口から火を噴き出した。

「ハハハ、ダンごめん水の中にたっぷりタバスコ入れたんだ」

マキは、ごめんとってはいるが、腹を抱えて大爆笑をしている。

「まひ、よくもやりやらったな（マキ、よくもやりやがったな）」
俺はそう言つと余りの辛さに口から出していた火をマキに当てた。

「ゲフッ」

マキの顔は少し黒くなり口から煙りを出した。

バタン

そして、ここで俺は余りの辛さに耐え切れず倒れた。

最初の町でこうなっているんだ、これから先一体どうなるのやら

マキのちょっとしたずら（後書き）

まさに、悪魔のようになっちゃいました（＾Ｏ＾）／

早起きは三文の特？（前書き）

タイトルの漢字当たってるか不安（・・・）

早起きは三文の特？

「うゝん」

俺は目が覚めた

「あれ？　そういえば俺どうしてたんだっけ？」

俺は、頭をフル回転させて今までのことを思い出した。

「と、言うところは、PCの寝室か」

俺はベットから出た。

だが、まだなにか布団が膨らんでいる。

俺はそれを覗いてみると

「なんだ、ヒトカゲかびつくりした。」

俺がそう言ったせいなのか、ヒトカゲが目覚めた。

『カゲ？』

ヒトカゲは、目を擦りながらボーツとしている。

「ヒトカゲ起こしちゃったか、わるい」

俺はヒトカゲにそう言う今度は……

『ダネダネ！』

フシギダネを起こしてしまった。

さらに……

「もうゝ　フシギダネうるさいわよ、どうしたの？」
マキまで起きてきてしまった。

「あつ！　ダン目が覚めたんださっきは、ごめんね」
さっき？

ああ、飯を食べていた時の事を言っているんだな

「大丈夫だ！　気にすんな」

俺は申し訳なさそうに、頭を下げているマキの頭を撫でながら言った。

昔からマキは、頭を撫でられるのが好きなのだ！
完璧にガキだ

「ダンありがとう！」

マキは、そう言っていると俺に抱き着いてきた。

「マキ離れて！」

「はい」

俺はマキに言っていると、マキはニコニコしながら離れてくれた。

「こんなに、早く目が覚めちゃったけど、どうしよう？」

マキは、俺にそう言ってきた。

棚の上に置いてある、俺の腕時計を確認すると、まだ5時前だった

「トランプでもやるか？」

俺は鞆からトランプを出して言った。

「うん、やるやる！」

「カゲ！」

「ダネ！」

ヒトカゲもフシギダネもやる気いっぱいだった。

「ババ抜きでもやるか！」

俺はそう言いながらカードを切った

「賛成！」

マキは、大声でそう言った。

「マキ他の人に迷惑掛かるからもう少し静かにしよ」
俺はそういうしながら、トランプを配っていた。

「はい」

マキは、そう言った

本当に分かってくれたのか凄く不安だ

元気すぎるマキ（前書き）

久しぶりの更新

元氣すぎるマキ

今は、ババ抜きが終わり朝の7時

「結構長い時間ババ抜きやってたんだな」

ダンは欠伸をしながらそう言った

「私なんて、一回も1位になれなかったよ」

マキは頭を下にさげながら、しょんぼり言った

「まあ、そう気をおとすな」

そう言つて、ダンはマキの頭を撫でてあげた

「えへへ／＼／＼／」

やはり、マキは頭を撫でられると機嫌が良くなる

「そつえば、ヒトカゲ達はまだかな？」

ちなみに、ただいまヒトカゲ達はポケモンセンターで健康診断を
してもらっている

「ただいま、健康診断が終了しました」

ジョーイさんが、ポケモン達のモンスターボールをもって出てきた

「ありがとうございます」

俺とマキはそう言つて自分のモンスターボールを手にした

「出てこいヒトカゲ」

「出てきてフシギダネ」

二人は、そう言ってモンスターボールを構えた
そして、ヒトカゲとフシギダネが出てきた

『カゲカゲ』』

『ダネフツシ』』

二匹は、元気にモンスターボールから出てきた

「よし、それじゃあ、ニビシティに目指してレッツゴー」

マキは、元気そうに右腕をあげてそう言った。

「その前に、トキワの森でピカチュウをゲットしよ」

ダンはポケモン図鑑を見てピカチュウの生息地を確認して言った

「私もピカチュウ欲しい♪二人でお揃いのポケモンゲットしよ」

マキはダンの手を引っ張りポケモンセンターを出て歩き始めた

トキワの森（前書き）

更新めっちゃ久しぶり

トキワの森

場所が移動して今はトキワの森

「トキワの森についたあ」

マキは手を伸ばしながらダンに言った

「なんか、ムシムシして暑いなあ、虫ポケモンの生息地だけあって」
ダンには自慢気に下らないダジャレを言った

「あ、あはは」

マキは無理をしてわらった

「さあ、馬鹿はやめてピカチュウを探すかあ」
ダンはそう言って歩きだそうとした

『カゲ』

ヒトカゲがダンのズボンを引っ張った

「どうしたヒトカゲ？」

ダンは下を向いてヒトカゲの方を見た

『カゲカゲ！』

ヒトカゲはマキの方に指をさした

「私無理に笑った意味ない」

『ダネダネ』

マキは落ち込みながら体操座りをしていてフシギダネは肩に手をあてていた

「あちやあ」

ダンは頭に手をあててマキに近付いた

「意味なかった意味なかった」

なんかマキがブツブツと呟いている

「はあ」

ダンは少し恥ずかしがりながらマキの頭を撫でた

「えへへ／＼／＼」

マキは照れながらテンションが上がって立ち上がった

「さあマキ、ピカチュウを探しに行くよ」

「ちよつとダン待ってよ」

マキはダンに付いて歩いていった

はてさて、2人はピカチュウをゲットすることが出来るのだろうか

……

『ピカピカ』

『ピカピカ!』

「いたあ!」

もの凄く都合良く2人の前にピカチュウが出てきた

ダンVSピカチュウ(前書き)

バトルシーン難しい

ダンVSピカチュウ

今はトキワの森にいる

俺とマキはピカチュウを探しに来ていて直ぐに見つけることが出来た

「『ピカチュウ発見!』」

『ピカ?』

今出てきたピカチュウは尻尾が普通のと尻尾がギザギザになってる
ピカチュウが出てきた

「多分、ギザギザの尻尾のピカチュウはメスね」
マキの予想だ

だが、マキの予想は外れたことがない………確か

「なら、俺は普通のピカチュウをゲットするぜ!」

『ピカピカ!』

ピカチュウの方もやる気マンマンのようだ

「ヒトカゲ頼んだぜ!」

『カゲカゲ!』

自分の頬を叩きながら前に出た

『ピ〜カチュウ!』

いきなりピカチュウがでんきショックを使ってきた

「ヒトカゲ避ける」

「カゲ！」

ヒトカゲは右にジャンプして避けた

「ピッカ！」

ヒトカゲがジャンプして身動きの取れない状況で、でんこうせっかを使った

「カゲー！」

ヒトカゲは空中に居たためでんこうせっかを避けられなかった

「ヒトカゲ大丈夫か？」

「カゲ！」

ヒトカゲはダンにガッツポーズを送った

「（どうやら、まだヒトカゲは大丈夫そうだが、このピカチュウかなりやる）」

ダンはピカチュウ戦略を必死に考えた

「ヒトカゲ火の粉だ！」

「カゲ！」

「ピカチュウ！」

ヒトカゲは火の粉を出したがでんきショックで全て弾かれてしまった

「ピカチュウに負けてちやジムリーダーに勝てる訳がない」

「ダン諦めちゃダメだよ！ヒトカゲは頑張ってるんだから」

マキは必死にダンに声援を送った

ちなみに尻尾がギザギザのピカチュウは木に登って勝負を見ている

「そつだなサンキューマキ」

「それでこそダンだよ」

マキはダンに向かってピースした♪

「よしここから反撃だ！ヒトカゲ木にひっかくだ！」

『カゲ？』

ヒトカゲは意味も分からずに木にひっかくをして木を倒した

「ヒトカゲその木をピカチュウに向かって思い切り蹴るんだ！」

『カゲ！』

木はゆっくりではあるがピカチュウの方に接近していた

「ヒトカゲちよつとこい」

『カゲ！』

ダンはヒトカゲの耳？元で作戦を説明した

『カゲカゲ！！』

そしてヒトカゲは木の方へ走った

ピカチュウは

『ピカ！』

ジャンプして木を楽に飛び越えた

「今だヒトカゲ！」

『カゲ！』

ダンがそう言うのとヒトカゲは一回木に乗ってそれからピカチュウに向かって大ジャンプした

『ピカ？』

ピカチュウは地面を見ると自分の影にヒトカゲの影が重なっていることに気付き上を向いた

「ヒトカゲ！思い切り火の粉を吐け！」

ヒトカゲは一気に空気を吸い込み一気に火の粉を吐き出した

『ピカ！』

ピカチュウは空中にいて回避不能&不意打ちだったので、でんきシヨックで反撃する暇もなく火の粉を食らい地面に叩き付けられた！

「よし！いけえモンスターボール！」

ダンは今だと思うとモンスターボールをピカチュウに投げた

（カタツカタツカタツ）

「ゴクッ」

モンスターボールが揺れていて緊張？して唾を飲んだ

（カタツカタツカチッ）

モンスターボールが揺れるのをやめた

「やったあ！ピカチュウゲットだぜ！」

「ダンおめでとう」

マキはダンに駆け寄ってそう言った

「サンキューマキもう少しで俺諦めるところだった」

「えへへ／＼／＼」

ダンはマキの頭を撫でた

マキは相変わらず照れている

「出てこいピカチュウ！」

ダンはさっきゲットしたピカチュウを早速出した

『ピカ？』

ピカチュウは犬見たいに頭をぶるぶる降った

「これからよろしくなピカチュウ！」

ダンはそのうとトキワシティのフレンドショップで買ったきずぐすりをピカチュウとヒトカゲに使った

『カゲ！』

『ピカ！』

ヒトカゲとピカチュウはさっきまでの疲れを無くしてピカチュウはダンの肩に乗った

「ははは（笑）可愛いなあ」

俺はピカチュウの頭を撫でた
そして

『ピカピカ！』

ピカチュウが鳴くと木に登っていたピカチュウが降りてきた！

「次はマキの番だな頑張れよ！」

「ありがとう♪出来るだけ頑張るね」

2人がそうやって話していると……

『ピカ♪』

ピカチュウはマキの腰に着いてた空のボールにタッチして中に入った

「ずっとっ！」「」

2人はこうして無事に新しい仲間ピカチュウをゲットした

ダンVSピカチュウ（後書き）

なんかあっけない

ライバル登場！（前書き）

ようやくライバルを登場させることができます

ライバル登場！

2人は今トキワの森に居てなんやかんや起きてピカチュウをゲットすることが出来た

(なんやかんやは前話をよんでね)

「マキが羨ましいよ、俺なんてピカチュウゲット苦労したのに」
ダンは右手でピカチュウ左手でヒトカゲの頭を撫でていた

「まあまあ、仕方ないよ」

マキは今お食事中である
ちなみにメニューは普通のサンドイッチ

2人は今歩き疲れてヒトカゲがピカチュウ戦で倒した木の切り株に座って休憩していた

「まあ、良いかもお互いピカチュウゲット出来たことには代わりないから」

「おーいダンとマキじゃないか」
ダンがマキと話して居るとある人物が駆け寄ってきた

大体の人は予想が着くよね↑えっ？わかんない

「ちょっと作者、俺の扱い酷くないか」

「「え」と、どちら様で？」

ダンとマキは息ぴったりで同じことを行った

「ダンとマキも酷いなあ、俺だよ俺、マサラタウンでダンとは違って一番モテていたケントだよ」

このバカで憎たらしい人物は………説明が面倒だから第1話を

「だから作者、なんで俺の扱いだけこうも酷いの？」

「ケントなに独り言いつてるの？ところでなんかよう？」

ダンは頭がイカれてるケントに告げた！

「作者！！まあいいか、ダンお前もポケモン貰ったよな？俺と勝負しようぜ！」

ケントはモンスターボールを構えてダンに言った

「やだ」

まさかのダンは二文字で断った

「頼む、頼むから勝負してくれ！」

ケントは泣きながらダンの足を掴んでそう言った

「ダン、勝負してあげたら？そして実力の差を見せ付けちゃえ」
マキはダンに拳を向けて言った

「仕方ないか、なら勝負してやるよ」

「そうか、そんなにバトルしたいのか仕方ないなあ」
ケントは直ぐに立ち上がりそう言った

「そんな生意気なこと言うならやめた」

「じよ、冗談だから頼むよ」

ケントは土下座をして頼んだ

「わかったから顔を上げろ」

「よしなら、マキをかけてポケモンバトルだ！」

ちなみにケントはマキに恋をしているのだ
まあ、マキはダンに一途だけだね

「ケント人間として最低」

マキは親指を下に立ててそう言った

「大丈夫だマキ、俺が勝てばいい話だ！」

ダンはマキに笑顔を送ってそう言った

「（ダンまさか私の気持ちに気付いてくれた？）」
マキは満面の笑みで

「ダン頑張って！」

つとダンを必死に応援するのであった

「バトル！！」

次回ついにライバル戦が切っておとされる！

ライバル登場！（後書き）

ちょっとケントをいじりすぎたなあ

ダンとケントのやり取り（前書き）

携帯の充電やバイので短いです
すみません

ダンとケントのやり取り

今ダンとケントは激しく？にらみあって（睨んでるのはケントだけ）バトルを始めようとしている

「ダン、俺の一番手はコイツだ」

そういつてケントの出したポケモンはコラッタだった

『コラッタ！』

コラッタはげんきよく鳴き声を出して出た

「コラッタかあ、俺はコイツだ頼んだぞ」

ダンはそう言つてケントの顔面に思い切りボールをぶつけた

『ポッポ！』

ダンが出したポケモンはポッポを出した

「ダン、ボールぶつけるなよ痛いだろ」

ケントは顔をさすりながらダンに言った

「ケントすまんわざとだ」

「わざとだったのか（笑）」

ケントは笑つてそう言った

「ポッポ今だふきとばしだ！」

ポッポがコラッタにふきとばしをするとコラッタはボールに戻つて言った

「コラッタ戦意喪失！ポッポの勝ち」

マキは審判をしていた

ライバルバトル決着（前書き）

バトルシーンかなり難しい

ライバルバトル決着

今はダンとケントはポケモンバトルしていた

「ダン、ふきとばしで不意討ちとか卑怯だぞ！」

ケントはダンに文句を言った

確かにケントの言い分はわかる

「ケントがバトル中によそ見してるからわるい」

ダンは肩にポツポを乗せて言った

確かにダンの言う通りだ！

「ところで、作者はどっちの見方なの？」

ちなみに今聞いたのはマキ

そりゃあ、ダンでしょ

性格は俺を本にしてるから

「そうだったの！？」

ダンはビックリしていた

あれ？知らなかったっけ？

「初めて聞いたよ」

ごめんごめん（笑）

「ってか、俺を無視するな！」

ケントはダンにそう言って怒鳴った

「こうなったら、自分達のエースで勝負だ！」

ケントはボールを構えてダンにそう怒鳴り付けた

「はあくうるさいやつだな、まあいいだろう！」

ダンは一カチユウを出して肩に乗せた

「ピカチユウ、ポツポちゃんとバトルを見てるよ」

『ピカ』

『ポポ』

ピカチユウとポツポは敬礼した

「ダン、さっきのお返しだ、今度はお前が顔面にボールをくらえ！」
ケントはそういつてダンの顔面目掛けてボールを投げた

「ポツポ、かぜおこし」

ダンはポツポにそう指示をするとかぜおこしをしてボールの軌道を
ダンからケントに向けた
そして……

「いつてえ！」

ケントの顔面にボールがあたりボールからポケモンが出てきてケン
トの顔に大の字になって張り付いた

「ゼニガメそろそろ離れて」

『ゼニ』

そう、ケントがオーキド博士に貰ったポケモンはゼニガメである
ってか、皆もう気付いてたよね

「なら、俺は来いヒトカゲ！」

ダンは切り株に座って居るヒトカゲを呼んだ

『カゲ！』

ヒトカゲはちょこちょこ歩いて来た

「バトル！」

今2人の本当のバトルが始まる

「ゼニガメ、たいあたりだ」

ゼニガメはヒトカゲに向かって突っ込んできた

「ヒトカゲ、ひのこだ！」

『カゲ！』

ゼニガメはたいあたりの体制だったから正面からひのこを食らった

「ダン、甘いぜ！ゼニガメは水ヒトカゲは火だから愛称はこっちの方が有利だ」

ケントは常識中の常識を自慢気にダンに話した

「ケント、そんな基礎中の基礎知ってるから！俺の狙いはダメージじゃないよ」

ダンはケントに指をさしてそう言った

「どういうことだ？」

「まあ見てればわかるよ！」

ダンの作戦に皆さんは気付きましたか？

「なら、一気にたたみかけてやる、ゼニガメあわだ！」

『ゼニ』

ケントはヒトカゲにヒトカゲの苦手な水系の攻撃を撃った

「ヒトカゲ、お前の力を俺に見せてくれ！」

ダンは一ヒトカゲを信頼してるからこそ一ヒトカゲにまかせた

→

こういうところは作者の性格とは違います

『カゲ！』

一ヒトカゲはガッツポーズをダンに向けると両手が銀色に光あわを全
て切り裂いた

「一ヒトカゲ、お前メタルクローを使えるようになったのか！」
『カゲ！』

そう一ヒトカゲはピカチュウとのバトルの時にメタルクローを使える
ようになっていたが、使わなかっただけなのである

「なに！新しい技だと！？しかもあわを全て切り裂きやがった」
『ゼニゼニ！？』

ケントとゼニガメは一ヒトカゲの新技を見て驚いていた
まあそこまで驚くようなことでもないけど

「一ヒトカゲ、ひのこを食らわせてやれ！」
『カゲ！』

一ヒトカゲはさつきより多くひのこを出した

「なんどやつても無駄だ！ゼニガメひのこを受け止める」
『ゼニ！』

ゼニガメはひのこを避けることすらせずに全弾食らった

「よし！やつとか」

ダンはゼニガメを見てガッツポーズをした

「ダン、一体お前は何がしたいんだよ」

ケントはダンに呆れてそういった

「ゼニガメをよく見てみるよ」

ダンはゼニガメに指をさしてケントに言った

「なに！？ゼニガメが火傷している！そうかひのこはこのために！」
ケントは誰でも気づきそうなことに今気付いた

「ヒトカゲ、なきごえだ！」

『カゲ〜！』

ヒトカゲはなきごえを使いゼニガメの攻撃力を下げようとした

「ゼニガメ殻に込もって耳をふさげ！」

ケントがそういうとゼニガメは背中の殻に入り中で耳をふさいだ！

「ケント、お前の手は読めていたよ！ヒトカゲ、ゼニガメを持ち上げて木にぶつけろ！」

ダンはヒトカゲにそう指示を与えると全力でゼニガメを持ち上げた
ゼニガメは持ち上げられたことにビックリして、殻から出てきた

『カゲ〜！』

ヒトカゲはそういうと思い切りゼニガメを投げた

「やられっぱなしは、好きじゃないんだよ！ゼニガメとおきの水でっぽうだ！」

『ゼニ〜！』

ゼニガメは水でっぽうを撃った！

だが、その水でっぽうはヤケに威力が高かった

「ヒトカゲ避ける！」

『カゲ』

ヒトカゲはさつきゼニガメを投げるのに疲れて座り込んでいた

『カゲ！』

『ゼニ！』

ゼニガメは木に激突すると同時にヒトカゲは水でつぼうを食らった！

「両者戦闘不能、引き分けたね」

マキはそついうとダンの方に駆け寄った

「ヒトカゲ、大丈夫か？」

ダンは一ヒトカゲに駆け寄ってきすぐすりを使った

『カゲ！』

尻尾の火もちやんと着いてるから大丈夫そうだ

「ダン、まさかゼニガメを投げるとは思ってたぜ」

ケントはゼニガメを抱えながらダンの方に歩いて来ていた

「おれもビックリだ！まさかケントが、火傷をわざとくらい体力がヤバくなると発生するゼニガメの激流を狙っていたとは」

「まあ、力は五分五分ってことだなあ（ゼニガメにそんな力があるとは知らなかった）」

ケントはポケモンの知識をほとんど知らない只のバカであった

ライバルバトル決着（後書き）

上手く書けない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5238h/>

ポケットモンスターSTORY

2010年10月24日02時05分発行